

## ■ 震災活動消防職員・団員の手記

※ 消防職員の所属は震災当時

### 人命最優先・最善の行動をとれ！

管制室  
福山 光

それは仮眠中のこと。

「何や！どないしたんや、止れ……」

「ガクン・ガクン」といった突き上げるような激しい揺れと、形容し難い轟音の中、私の上に重たく覆い被さった物があった。

それが三連のスチール製ロッカーであることと、尋常でない事態に陥ったことを察知するのに数秒たりとも要しなかった。が……

平成7年1月17日午前5時46分、私はこの時、わずか20秒足らずのこの揺れが死者5,502人、負傷者約41,500人、全半壊家屋193,000戸余り、経済損失10兆円以上という未曾有の大地震発生の瞬間と知る由もなかった。

発生の前日、すなわち1月16日午前9時から就勤した私は、極めて平穏なうちに、後数時間で24時間の勤務を終えようとしていた。

当日の勤務員は7名、指令員2名を除き他の4名と私は、仮眠室の一番出入口に近い位置で仮眠していた。

覆い被さるロッカーと雑品の中からはい出すと室内は真っ暗、足元常夜灯すら消えている。

「停電だ！」普段なら何の苦もなく、仮眠室から管制室まではほんの10メートルばかりを進めばよい。しかし、この時ばかりは勝手が違っていた。庁舎そのものが修羅場と化していた。

「危ない。足元を固めなくては」と思った私は上履きではなく、短靴を着用した。

わずか10メートルの距離をどのように進んだのか、定かな記憶を持ち合せていないのは、大きな興奮と動揺のせいだろう。

それはもう「必死」、今想えばこの単純な言葉程、当時の私の心情を表すのに当を得た言葉はない。

管制室に入ると、様相の一変した室内に勤務員2名の大声と、全てが点灯、異様に光る119番着信ランプが飛んできた。

「119は生きている。」

「とにかく明りと無線を」私は別室消防課へと走り、戦場さながらの室内から、強力ライト1個と携帯無線機2台を見つけ出し、すぐさま管制室へと駆け戻る。この間数分、まさしく「火事場の底力」。この時程、自分の行動が速やかだったことはかつてなかったかも知れない。

無線統制卓に就くと「にししょう〇〇、××現場に向かう」と、ある小隊長の声。

「ヨシッ！基地局はOKだ。」と、しかしこの時、この先数十時間にわたり、部隊と無線統制に就くことになるとは到底考え及ばないところであった。

他の勤務員は119番の対応にフル活動、専用線の確認を指示すると、「OK」との報告。

119番・無線基地局・有線と消防の生命線は絶たれていない。

あとは我々だ。そう思った時、不思議と自分の中にある種の落ち着きを覚え、強力ライトの余光を頼りに、できる限りの記録を残すべく散乱する中から雑用紙をかき集めた。

各署の受付には何十人、何百人が救助を求めて押し寄せているという。

その中、「管制室！ 部隊への指示を。」の各小隊長の声、時を同じくして「各隊に告ぐ。全ての事態に人命救助を最優先として最善の行動をとれ。」

これが全隊に向けて発した、管制室指示としての私の第一声である。

「アパートが全壊、7名程生き埋めがいる。」

「ガスが洩れている。非常に危険。」

「ビル崩壊。生き埋め多数。声がしている。」

「新幹線の橋脚崩壊、脱落。」

「国道の陸橋が倒壊、落下。」等々……

信じられない。まさに悪夢としか言いようのない信じ難い情報が矢継早に入ってくる。

「生きている。応援隊を……声がしている。」

「燃え移る。応援を……」それはもう絶叫に近かった。

残念だが私は無論、おおかたの職員の経験も、知識も、はたまた西宮消防の消防力をもはるかに凌いだ事態と認めざるを得なかった。

「全ての隊が出動活動中。応援隊は出せない。各隊は近隣住民と協力して、でき得る限りの救助作業にあたれ。」何度、何度、この言葉を繰り返したことだろう。

「何とかしたい。応えてやりたい。」  
応援要請に応えられないもどかしさ。  
……無念……ただ、ただ 無念……

次々と参集する非番職員。

西宮消防局管制室に指揮本部が設置されたのは、いち早く駆けつけた消防局長を中心に、平成7年1月17日午前6時20分のことである。

直ちに非常招集がかけられたが、この時すでに各職員は、自発参集としての行動を起こしていた。

また、事の重大性から自衛隊の派遣要請の指示を受けるも、受入側の機器の障害からこれを断念せざるを得なかった。

立続けに入る119番と、各隊からの要請に可能な限り対応したい。車両部隊のみならず徒歩部隊も編成される。

「目前に生き埋めがある。人と機材があれば生存救出可能」現場からの焦躁感溢れる声が管制室内に流れるが、分っていてもこれが不可能。

……激しいジレンマに包まれる。……

一方、119番の緊急通報受信にも、苦渋の対応を強いられる。

何時間経ったのだろう。いつまで続くのだろう……この事態は無限なのだろうか？

一瞬そんな思いが脳裏をよぎる。

気がつけば就勤後3日目の朝。家を守る妻子のことが気掛りだ。妻は子供は大丈夫だろうか。せめて安否だけでもと膨らむ思いは、この渦中にあっても払拭することはできなかった。それは覚悟の職業選択だ。と批難されても、今の私は甘受するつもりでいる。

わずか20秒足らずの「揺れ」が残した爪痕は今なお深く残っているが、発災以後私は、いや西宮消防は一生懸命だった。できる限りのことはやっ

た。決して満足感はないけれど、それでも西宮消防は一生懸命頑張った。

反省すべき点もある。

消防団の動きの把握、道路情報の早期収集、119受信後の優先順位の決定、機器の耐震固定化等々……だがここでそれを列挙しようとは思わない。

ただ教訓とすべきは、近畿圏で大地震は起こらない。この慢心にも似た気持ちは戒めなければならない。どの地にあっても十分起こり得る可能性がある。今となっては決して「対岸の火事」ではない。

このことは誰もが、肝に銘じておかななくてはならない事実だということである。

## 平成7年1月17日の反省

整備センター

村本保夫

1月17日早朝、激しい縦揺れに続く横揺れにより起こされたが、一瞬何が起こったのかわからず、ダンプカーか飛行機が家に突っ込んできたと勘違いする程の激しさであった。揺れが治まるまで金縛りにあったごとく身動きできなかったが、一呼吸して妻及び子供3人の無事を確認して安心した。

家族全員は2階で寝ていたが、真っ暗闇の中、転倒している家具類により歩くこともままならず手探りで階下に降りたものの、足の踏場も無いほど部屋は散乱しておりどうしたら良いのか思案していたところ、幸い子供が小さなポケットライトを持っていたため、これを頼りに懐中電灯を探し出し、家の中を点検しようと各部屋のドアを開けようとしても大半のドアは開かず、体当たりしてようやくこじ開け、取り急ぎ電気のメインブレーカーを切った。

ここでまず第一の反省

「備え在れば憂いなし」の諺の通り各種訓練等を通じて、市民に防災意識の啓発に努めてきたが、いざ自分のこととなると家具の転倒防止対策、非常灯の把握等何一つ実行できていなかった



ことを深く反省している。

それから表に飛出してみると、倒壊した家も無く、また救助を求める声も無かったため、地震の被害はそれほどでも無かったと思い込み、剥がれた外壁の後片付けをした。

## 第二の反省

近隣の状況から、被害は大きくないと思った判断の甘さ。

表の片付けをしていた最中（時間ははっきりしない）、東の空から黒煙が上昇しているのを発見、とっさに火災が発生、それも我が家から2軒隣位と直感（実際は4軒隣であった）、急いで119番通報するも通じないため向いの人に続けて電話するよう依頼し、火災現場に向ったところ既に初期消火の域を脱していたが、近所の方が消火器で消火を試みていた。

私はこのままでは延焼拡大してしまうと感じたが、頼みの消防車が来なければ打つ手が無い。しかしこのまま手をこまねいて見ている訳にも行かず、とりあえず消防車が来た場合の水利を確保しようと自宅の西を流れている四十谷川をせき止めることを考え、行動に移った。幸いにもせき止める物には不自由しなかった。…落下した隣の家の玄関のひさし、壊れたブロック塀のかけら…これらを近くに居合せた人と協力して川に投込み堰を築いた。（この時点では、私は断水していることを知らなかった。）

そうこうしている内、けたたましいサイレンの音が聞こえた。「消防車が来た。これで消火できる。」と内心安堵した。サイレンが鳴っている方向に向うと、地元の門戸分団の車両が神戸女学院前の消火栓に部署しようとしているところに遭遇した。分団員が慌てている。…断水の為取水できないのである。

ここから私の戦闘開始である。

直ちに消火栓から吸管を外させ先の四十谷川へ部署変更した。私は機関担当し、分団員の方に放水準備を依頼した。

建物火災では、通常4～5台の消防車が出動するが、今回は1台で対処しなければならない。包囲態勢を取り、延焼防止を図らねば。

…水量は十分あったので吸管を2本投入し、2線放水を指示した。建物は、角地にあり南面と西面に筒先を配備し、延焼防止に努めた。

しばらくして、もう1線追加しようとしたが、筒先とホースが無い。屋内注水をしようとしても破壊道具（はしご、掛矢等）が無い。道具は他の分団員の方が近くでの救出作業に使っていた。仕方なくこのままの態勢で放水を継続した。昼前位（時間ははっきり覚えていない）には、延焼のおそれが無くなったため、分団員の方に後を引継いだ。

私は、4日程前から風邪で仕事を休んでいた。しかし、この時ばかりは風邪どころではなかった。取り急ぎ濡れた服を着替え、消防局に向った。

## ここで反省

本件火災では、運良く消防団車両が1台とはいえ、来てくれたため消火できたが、こなかった時のことを思うとゾットする。車両及び資器材の不足を痛感した。また何らかの方法により屋内注水をもっと早くすれば、消火時間を短縮することができたかも？

整備センターではなく、とりあえず消防局に出勤しようとしたが、青木町で一人住いの母親が気に掛かり立ち寄って見ようと単車を飛ばした。青木町方面からも黒煙が立ち上がっているのが目に入った。不安にかられながら家に着くと、全壊であった。母親の姿はない。どうしたのだろうと思っていた時、隣に住む姉が出てきた。額から血が流れていた。聞くと倒れてきた家具で傷を負ったそうだ。もちろん家は全壊である。姉から母親の事を聞くと、幸い母親の寝ていた場所は壊れず、けがもしていなかったが腰が抜け動けずいたため、姉と子供で外に担ぎ出したとのことで安堵した。しかし、まだ出勤するわけにはいかなかった。

南向いの家の娘さんが、母親が家の下敷になっているから「助けて！」と叫んでいる。辺りを見

ると、あっちこっちで生き埋めの人がいるらしく、近所の人を持ち寄ったノコギリ、バール、車のジャッキ等で救出活動をしていた。人力では、作業はなかなかかからない。付近住民、警察官等が協力して何人かを救出した。私も協力して3人(南向いの家の母親を含む)の救出に成功した。しかし重機の必要な現場も多数あった。

#### ここで第四番目の反省

重機とまではいなくても、そこそこの救助資器材が数多く手元にあつたらと悔やむとともにこのような広域での大災害では、我々消防、警察等だけでは到底対処できないため、全市における地区防災組織の早期結成を図り、住民が一致協力する体制作りが急務であることを痛感した。

付け加えて私事ながら、市民の公僕たる公務員であると思いつつ、やはり人の子、母親の事が最初に気に掛かり、行動したことが心の隅に引っ掛かった…。

救出活動が一段落した後、急いで消防局に出動してみると、庁内はまるで戦場のようなパニック状態であった。

私は、上司から消防課員の調査班に入るよう命令され直ちに行動に移った。業務内容は、救助要請のあった119番通報現場への安否の確認であった。

資搬車に便乗し出動するも、交通渋滞、倒壊家屋、折れた電柱、道路陥没等の障害を避けながらの現場確認であったが、大半は自力脱出、救出済みであり、これの確認の為付近住民への聞き取り、避難所への調査等結構時間を費やした。

生き埋めの可能性のある現場には、救助隊の出動要請等を連絡しながら各地を廻ったが、特に夙川方面の被害が大きかった。

道路の至る所から漏れているガスがかけろうのように噴き出しており、二次災害に注意しながら危険との隣り合わせの行動であった。

何回かの調査を終え帰庁後は、本来の業務である後方支援活動についた。

出動車両の燃料補給の確保、車両及び各種機器の故障に伴う応急修理体制等…。様々なことが

あった長くて短い、また一生忘れることのできない1月17日が過ぎ去った。

## 大地震との葛藤（我が分隊と住民）

予 防 課

野 田 善 治

平成7年1月17日5時46分、大地震が自宅の2階で妻と就眠中、何の前ぶれもなく突然やってきた。

私は本能の赴くまま妻を抱き寄せ覆い被せ、揺れの治まるのをじっと息をこらして待っていた。

揺れが治った直後、別の部屋にいた子供に声をかけ無事を確認し、暗闇のなか部屋から出ようとしたが、タンスや本棚が倒れ身動きがとれず、どこが出口なのかさっぱり判らなかったので、本棚から懐中電灯を手探りで見つけタンス類を乗越え階段を降りようとする、階段が落下していたため、2階から梯子で実兄の手助けにより避難した。

家の2階は殆ど垂直に建っているが、1階は西側に1.5mも傾いていた。

その後、近隣者2名を梯子で救出したのち、子供たちを妻に託し着のみ着のまま消防局に自転車で出勤した。出勤途上、東上空から黒煙が3ヶ所上がっているの確認するも、とにかく消防局へと急いだ。

出勤し作業服に着替えようとした時、既に出動し指揮をとっていた消防課長より、「中野、小川、中谷と君の4名で弓場町の火災現場に出動せよ。4号車に可搬式を積載している。無線は……」の指示により出動、現場到着後、直近の消火栓を点検するも予想どおり水圧ゼロのため、防火水槽に部署、消火活動に従事する。この消火中、多数の住民から「家が倒れ生き埋めになっている。ケガ人が多数いる。ガスが噴出している。」等の通報が引切りなしに入ってくる。その度に無線で応援要請するが返って来る応答は、「応援は無理、現場で対処せよ。」であった。

市内全域が壊滅的な状態で消防隊だけでは到底対処できないことは判りすぎるほど判っている



が、やはり応援が来ておれば何人かは救出できたのでは……また、人命が第一か消火（命令）が優先か、たった4名で何ができるかとジレンマに陥っていた。

火災が鎮火状態になった後、20時頃まで現場近隣の救出に向い何人かを救出したものである。

現場での我々消防に対する住民の意識は、手前みそになるが一口で言えば「信頼」という言葉に尽きるのではないかと思われた。それだけに何とかして、消火、救出を迅速に行うことが出来ないかと思った。

我々に通報してくる住民に「皆さん方で救出して下さい。我々は消火で手が一杯、応援もありません。市内全域がこんな状況です。」この言葉で殆どの住民は理解を示し近隣住民と協力して救出していた模様でトラブルはなかった。

最近は、住民同士の付き合いが少ないと言われているが、いざこのような災害が発生したら、殆どの住民はじっと悲しみに耐えて一致協力して助け合っている情景は本当に素晴らしいことだと感じた。

最後になりましたが、この震災で亡くなられた皆様のご冥福を心からお祈りします。

## 生還から災害現場へ

西宮消防署

和本 誼 紘

その時！はまだ自宅1階で眠りの中。

突然の激しい揺れでとっさに立上がったが、後にそれぞれの体験者が語るように、立て揺れの後横揺れがきたのか、何秒位の揺れであったのかは全く分からない。

立上がった体が激しく揺さぶられる内、天井が落下してきたので肩に力を入れて全身で支えようとしたが、それは空しい抵抗であり、なされるままに家の下敷になっていくのが分かった。

「死にたくなかったもこのように死ぬ時もあるのだな！」この脳裏をよぎったものは何だったのか、もっと生への執着があってもよいのに……。

しかし幸いにも体一つが寝伸びて入るだけの空間にすっぽりと収まっており、そろりと手先・足先を動かし、何処も挟まれていないことが確認出来たので、渾身の力をこめて覆い被さっているものを押し上げようとしたがピクリともしない。助けを待つしかないことを悟った。

家族の安否を確認するために全員の名前を大声で呼び掛けると、

1階階室で寝ていた妻は、「これ何、どないなってるの」「お父さん！大丈夫」「ゆう子！さよ子！大丈夫」「ゆう子の成人式が終わったばかりなのに死んでたまるか」

妻も体一つが入るだけの空間にいる様子。

私が頭越しに手を伸ばすと丁度届く位置に妻の手が伸びてきてまずの無事を確認。

2階ベッドで寝ていた長女は（後で聞いた事も含めて）、

揺れと同時に怖いため布団を被って、何かが崩れる音を聞きながら地震が収まるのを待ち、布団をめくると「うそ一何で屋根が前にあるの」

「ワー空が見えてる」「お父さん！お母さん！（移動しながら泣き声で）」

2階和室で寝ていた二女は、「何かに挟まれて動かれへん」

タンスに足を挟まれていたが、何とか自力で脱出出来た模様である。

二女は最初に西宮警察署へ、次に西宮消防署へと救助を求めて駆込んだが共に所在と名前を聞いたのみで来てくれそうもないと感じたと語っていた。

特に消防署には他の人も救助を求めて受付前行列をなしていたとの事である。

家の外へ飛出し我が家の倒壊に気付き、駆け付けて来てくれた近所の人の呼び掛けに、応答するが聞こえていない様子。

中からは良く聞こえているのだが……。

さらに、覆い被さっているものを叩いて知らせようとしたが、叩くと埃か壁土の様なものが顔に落ちて息苦しく、声で必死に自分の存在を知らせた結果やっと気付いもらえ、救出にかかろうとするが、瓦礫の山を前に何処から手を付けてよいかわからない様子が中から感じられる。

近くに住む父妹弟等も駆け付けて来た模様。

それでも埋もれた位置を大体確認が出来、作業にかかってきている。

その作業は、屋根瓦を取除き、野地板・天井板を剥がし、2階の畳を包丁とナイフで切って約50センチメートル大の穴を開け、同階の床板を捲り折って人が出れる大きさの穴を開ける手順である。

途中で一度だけ外の緊迫した様子があった。それは「消せ！消せ！」の声と叩き踏み消す様な物音であった。

垂れ下がった屋内電気配線がショートし何かに燃え移ろうとしたのだという。

「火事になったらやばいな！」と思った。

救出作業を行いながら安否を気遣う外からの呼び掛けとは裏腹に、埋もれて窮屈ながら体の何処も圧迫されていない安心感からか、外に対して「中は大丈夫だからゆっくり作業を進めてくれ！」と返答し、妻とは互いに励ましながら色々とお話をしていたのです。

その中で妻は「早く出て助ける方に回りたいのではありませんか？」とも……。

先ず私が救出され、次に未だ埋もれている妻を救出するために、上記の畳を切る手順以下を私が行い妻も脱出することが出来、地震発生から約1時間、幸運にも恵まれ、2人共無傷で生還することが出来たのでした。

見ると、2階建の家全体が瓦礫の山様に崩壊し、救出された穴には私と妻の頭部が有った所を二分する形で梁が落下し、三角状の空間にそれぞれが入っていた事が初めて理解出来たのである。

この事は、後の救出現場に於いての惨状を見る度に、正に奇跡としか言いようがないとは思わずには居られなかったのです。

パジャマ代わりのトレーナーとジャンパー姿で、署まで約5分の距離を徒歩で向い、署内を見ると受付員を残して人員車両共出払い、数人の自発的参集の署員を見掛けた。

服を着替えて出動体制を整えると同時に甲子園五番町の火災出動指令。

既に駆け付けていた梶本司令補と初めて顔を見る北署の鈴鹿消防士との3人で隊を編成し、広報

車にホースと消火栓キーを積載し、現場到着、放水するべく消火栓を開放するも一滴も出ない。

ほぼ同時に到着した消防団と協力して防火水槽から放水、途中で水槽が空になり他の水槽に部署替え。3棟を焼いて8時過ぎに概ね鎮火となった。

引続き転戦を求めると、戸崎町の火災への出動指令があり、現場到着するも同様に消火栓から水が出ないため、状況報告とポンプ車出動を管制室に無線連絡し現場を離れた。

続いて、平木町の一般民家及びアパート倒壊現場へ……。

以後、果てしなく続く救出活動や消火活動へと立ち向かうこととなるのです。

もっと助けることが出来たのでは、もっとやれたのではと思う一方で、ほぼ全職員が被害を受けていながらの活動は、公共のためこれが任務だとは言いながら、使命感に支えられ本当に皆が頑張ったと思うのです。

余震の続く中での救出活動、放水した水が凍る寒さの中、夜を徹しての消火活動……、死力を尽くしての活動であったが、正直なところ「何とそいつい因果な職業やナー！」と思ったのは私だけだろうか。

しかし、活動を通しての隊員同志の信頼感、連帯感が改めて認識でき、この様な職員達と今後もしょに仕事を続けて行けることの喜びを感じずにはいられません。

二度と経験したくないことではあるが、重要なこと、必要なこと……、何かを与えてくれたとも思うのです。

## 震災活動手記

北夙川分署

大村 忠 男

平成7年1月17日・午前5時46分、北夙川分署1階・消防仮眠室にて当直仮眠中、怒り狂った地の神の手荒い方法でたたき起こされる。しばらくの間、何が起きているのか判断もつかない。掛け時計の落ちる音がする。安全な場所に移動しよ



うとするが、あまりにも激しい揺れのため立つこともできず四つ這いのままジッと揺れのおさまるのを待った。

揺れがおさまると同時に車庫に飛出し、車両の点検中、救いを求める付近の住民数人が駆け付けてきた。

通報を受け救出現場へ向うも、二階建であった住宅がほとんど平屋になっており、電柱は折れ傾き、道路は波打ち亀裂が走り、漏れ出た都市ガスが鼻をつく。

ポンプ車で出動したため、これと言った救助機材も持たず、全て手作業で救出にあたった。機材があれば少しでも早く救出ができたのにと悔やまれる。

何件かの現場を回り、印象深いものとしては、仁川百合野町の土砂崩れ現場における大学生を中心とした付近住民の消火協力と人命救助の活躍である。

水が出ないため、大勢の住民が道路に縦一列になり風呂の残り湯をバケツ・リレーで運び、火災家屋の消火にあたっていた。その長さは約200mにおよぶ。

また、火災家屋内に取り残された生存者の救出にも大活躍をした。

最近の若者は、自己本意で他人の災難などは見て見ぬふりをするとよく言われているが、“やる時はやる”と、心強く感じられた。

その反面、「川に押し流され、土砂に埋もれた者を早く助け出せ！」と中年男性が言いよってきたので、「1現場に消防車1台がやっとなです。あなたが行ってやってください。」と協力依頼すると、口をもごもごさせその場から立ち去って行った。人はさまざまである。

後日、救出された男性のコメントが新聞に掲載されていた。

…足を挟まれ逃げ出す事が出来ず、半ばあきらめていたところバールの様な物が入ってきた、これで足を挟んでいるものを押し広げたところ救出された。

…との記事である。鉄の棒1本が人間の命一つ助けたのだなと感慨深く思うと共に41号車に積載し

ていたバールの行方が判明する。

人類が初めて経験した未曾有の大災害、日頃の備えも何一つ通用せず遠慮なく襲いかかってきた。

人は口々に「もお、ええ!」、「もお、いらん!」とこぼすが、これからが正念場である。

命は助かったものの住む家も、職場も失い途方にくれる人が大勢いることを忘れてはならない。

テレビの震災報道を見ては、当時の事が思い出されあまりの恐怖と酷さにわけもなく自然と涙が流れ出てくる。

母親の死を知らず、崩れた家の前で無邪気に遊ぶ小学生の姿は、今も忘れられない。

二度と、この様な不幸な事が起こらないよう心から願うとともに、災害から市民を守る防人として精進することを心新たに決意し、勤務に邁進する毎日である。

1995・01・17・05・46 一生忘れる事の出来ない数字になった。

## 心の葛藤

鳴尾消防署

中 鳴 良 光

地震当日私は、午前5時まで受付け勤務でその後交替して仮眠室で仮眠をとっていた。

午前5時46分突然背中を突き上げられ、布団の上で飛び跳ねているような状態で目が覚めた。揺れる中で部屋の引き戸が大きな音をたてて開いたり閉じたりしている光景が今でも焼きついていいる。初めは余りにも激しい振動だったので、地震とは思えずトレーラーがぶっかったと思った。訳も判らず受付け前に飛んでいき、外を見ると周りは停電で真っ暗だった。直ぐに近所の人達が詰めかけてきて「あっちでガスが漏れている」「こっちで家がつぶれている」など皆が口々に叫んでいた。直ちにポンプ車で出動し救助活動が続けるうち、管制室からの指令で火災現場へ向かおうとしましたが少し進むと「人が生き埋めになっている助けてくれ」と、引き止められ現場に向かうこと

も出来ない状態だった。

あちこちの家が倒壊し何処から手をつければいいのかかわからず「誰かいますか？居たら返事してください」と、声をかけ、声がするところを優先して救助していくしかなかった。救助活動が続け中、考えることはやはり家族の安否だった。神明町の火災現場で自宅が見えたとき一目で倒壊しているのがわかった。その瞬間私は、両親の死を覚悟した。いま直ぐにでも助けに行きたいという気持ちと、消防士としてこの現場を離れることは出来ないという使命感の葛藤が続く中、両親を見捨てて涙を流しながら無我夢中で救助活動をしていました。その日は、23時頃まで飲まず食わずだった。

帰署後、救急隊員から渡辺病院で私の両親に会い、母親が怪我をして入院しているが命に別状のないことを聞き、生きていてくれてよかった。もし死んでいたら自分の取った行動を一生悔やまなければならなかったかもしれない。

本当に生きていてくれてよかった。

しかし、その喜びもつかの間19日に叔母が亡くなったという知らせが入った。地震による負傷で胸が陥没し、それが原因で呼吸不全という診断であった。

今回の地震で多くの命が奪われ、私以上に辛く哀しい思いをした人が多くいると思うと地震に憎しみさえ覚えた。

もう二度とこの様な思いはしたくない。

## 二つの涙

瓦木消防署

### 服部 員 己

1995年1月17日未明、救急隊寝室で浅い眠りにについている。突然の激しい揺れで目を覚ます。あまりにも激しい揺れのため夢ではないかと疑うが、寝室の他の3人も起きています。夢ではない。

地震と直感したが、被害の大きさは全く予想出来ないものであった。

庁舎内を見て歩くと事務机がバラバラ、書棚が倒れている。

受付に行くと付近住民が救助を求めて続々とやって来ている。

「子供が、おじいちゃんが、おばあちゃんが家の下敷になっている助けて下さい。」

「今、全車両出動しています。メモに住所と氏名を書いて下さい。後からすぐ行きます。」こう言うしか出来なかった。

その数、百数十人は来たと思われる。

この時、相当な被害状況であると感じたが、まだ、あの甚大な被害を想像することは出来なかった。

出動車両等からの被害状況の連絡はない。情報が足りない。火災の駆け付け通報がある。

広範囲に被害が及んでいることは確かである。住民への対応が困難になってきた。「早く統括指揮者がほしい。」焦りが出てきた。「早く明るくなれ、なれば何とかなる。」心の中でつぶやく。

そうこうしていると高木地区から応援要請があり、救急隊2名と救助活動に向うが、現場はあまりにも被害が大きく、人の手ではどうしようも出来ない有様である。

隊員2名は消火活動等に当り、私は「負傷者がいる」と住民に手を引かれ、単独行動をとることになってしまった。

負傷者はすでに死亡していた。若い女性である。他の場所では6~7才の女の子が死亡している。

トリアージを行った。家族に救急搬送は出来ないと説明する。

早く救急体制を立て直さなければ重症者に対応出来ない焦り、隊員2名を探しながら救急車に戻るが隊員は見当らない。

途中、誰かの声がした。「震源地は淡路島、被害は神戸から東へ広い範囲でメチャクチャだとラジオで言っていた。」

不安が頭の中をよぎった。須磨の家族の安否だ。妻や子は無事だろうか。もしかして…。

しかし、今の自分は、家族には何もしてやれない。

今、出来ることは、この場の住民の救出である。「家族の無事を信じよう。信じるしかない。」

時間が経つにつれ救出された者が多数あらわれ



る。死亡、重症者等さまざまである。

本来、ここでトリアージを行うべきであるが、トリアージなど出来る状況ではない。その家族が許すわけがない。

大災害の現場におけるトリアージは、今後の課題である。

このままでは、救急活動が出来ない。体制立て直しのため自己判断で帰署することにした。

付近にいた消防隊の機関員と2名で戻る。

管制室へ無線連絡「39号車は一旦帰署する。現場では救急活動が困難である。以後は現場からの要請出動とする。」

その後、何件かの出動要請があった。ガスの漏れ現場、救助活動、負傷者の搬送等を行い、気が付けばもう日も暮れ、あたりは暗くなっている。

家族とやっと連絡がついた。無事である。「食べ物はない。ガス水道も出ないが、何とかやっている。娘（6才）がよく手伝ってくれる。」と言う。

私も「当分帰れないだろう、頑張ってもらいたい。」と伝える。

帰宅したのは、7～8日後。妻と娘の元気な顔を見ると目にうっすらと涙が…。

ふと、思い出した。倒壊家屋の下で死亡した母親の腕の中から1人の幼い女の子を無事救出した時、やはり目に熱いものがあった。

もう、こんな涙はいらない。

## 兵庫県南部地震を体験して

甲東分署

岩見真吾

私は、震災当日西宮市瓦木消防署甲東分署において当務主任としてその朝を迎えた。1月17日5時46分2階仮眠室で仮眠中ゴォーという地響がしたと思うと下から突き上げる様にドォーンという音がして私の体は数10cm飛上がった様に思う。そして横振れが約10秒間続いた。「あっ、地震だ」と思ったが声がかない、私はスチールロッカーの前で寝ていたためロッカーが倒れると思い、とっ

さに頭から布団を被り身構えた、その瞬間ロッカーが倒れてきた。実際のところ立ち上がって逃げる余裕がまったくなかった。仮眠室のあちこちで「わぁー」とか「地震やー」「大丈夫かー」と言う声が聞こえる。私はロッカーの下からぬけ出し、私の隣に寝ている藤本君を見ると完全にロッカーの下敷となり、身動き出来ない状態である。2・3人でロッカーを起こし「大丈夫かー」と聞く、布団の中に入ったままの状態はどうやら怪我もなく助かった。

仮眠中の者の内2・3人の人は、ロッカー上の物品や時計・鏡等の落下物で頭や腕にかすり傷を負った程度で全員無事であった。署員は一瞬ざわめいたが即庁内状況の確認や庁舎の屋上に上がって市内状況の確認等各人は行動に移った。

倒れた庁内物品の整理をしている余裕はない。各車出動準備体制を取った。全員がガレージに集合出動体制で待機中5時55分頃4・5人の市民が駆付けて「〇〇で家が倒れているすぐ来て下さい。」とそれぞれが一斉に言う。その後も5人10人と駆付け庁舎1階救急仮眠室は一時的に避難所となり人であふれた。

私は、5時55分西宮市上ヶ原六番町の家屋倒壊現場に向い7名を救出、その後管制室の指令により分銅町・常盤町方面に転戦3件の救助作業と1件の消火作業を実施、更に、南昭和町の火災現場へと転戦して甲東分署へ帰署したのが翌18日1時30分頃で、出動から帰隊まで約19時間30分ある。今から思うと“火事場のくそ力”とよく言われるが、一時も気を抜くことなく各現場では必死の思いでの救助・消火活動の連続であり、隊員は疲労困憊で限界に達しており、食料に有り付けたのは南昭和町の火災現場で既に0時を廻ってからである。隊員は、使命感から不平を言うどころか逆に、この末層有の大災害の中で多数の人命救助が出来たと、消防人で有ったことの誇りすら感ずる晴れとした顔に私は安堵したものである。

特に印象にのこる4件目の救助活動では（分銅町・磯貝方）72歳の老女が倒壊家屋の1階で下敷になっており、家屋は1階部分が完全に倒壊し、2階部分はやや傾いて残っている。2階床面は地

面から1mもない現状で2階は西面にずれる様に倒壊した1階に乗っている。そのため、要救助者は2階和室の真下であると聴取するも声をかけると応答は東側の部屋の下から聞こえる。この位置は部屋と部屋との間の2階の梁や崩壊した階段等がれきが複雑にからんだ場所で、声の確認は取れるが破壊救出位置の決定に手間取った。又、余震も続いており2階部分が倒壊していないといえども管柱等は折れ曲がり、いつ崩れるか判断しがたい状況で、建物内部での救助作業を命ずるのに躊躇したのも事実である。

掘出し救出に際しては、切ってはならない柱（2階部分の倒壊・要救助者の損傷等の危険性）等もあり、細心の注意を払いながらの作業であった。やっと要救助者の身体を発見、要救助者は3・40cmの隙間で布団の中にいる。パール・チェンソー・スプレッダー等を用いて救出しようとした時、住民が駆付けてきて「裏の倒壊した家が火事です。」と言う、「この人を助けるのが先だ、近隣者のバケツリレーで対応して下さい。」と依頼し救出作業を続行“尻に火がつく”とはこのことで必死の思いの作業が続く、もうすこしだという時にまた住民が来て「私たちではどうにも出来ません、ものすごい勢いで……隣へ燃え移ります。そばの消防車も燃えそうです。」と言うので、2名が消火活動に向い、私と藤本君が残り早く救出せねばとあせる気持ちと、火の手をなんとか押さえて欲しいと必死の作業でなんとか救出、火災現場に駆付けると隊員と市民が協力して放水中であった。

幸いにタンク車であったので即放水出来て一時的ではあるが一応火の手は押さえられたが、すぐ下から火の手が上がる状況で長時間放水態勢を取る必要があり、市民に水管延長協力を依頼し、安井小学校プールに部署した。概ね鎮火後鳴尾中分団が応援に来た。倒壊家屋の火災は折り重なるがれきのため死角が多く、消しても消しても下から火がでる状況で完全鎮圧まで約5時間を要した。

当日の活動を通して痛感したことは、大自然のパワーのものすごさに、人間はなすすべもなく打ちのめされ、現状を見るにつけ背筋の凍る思いで

あった。この様な現状の中で、市民が近隣愛護の精神を発揮し救助活動をする姿を見るにつけ、広域大災害に際しては消防の組織力だけでは限界が有り感慨深いものを感じた。又、“備え有れば憂いなし”とよく言われるが、我が消防局も含めて阪神間は地震がないと言う神話めいたものがあり、あまりにも備えが無かったと思われる。私たちが意識付けとして持っていた地震に対するマニュアルは全く役に立たなかったことも大きな反省点である。

以上のことより、再びこのような大地震が発生した場合一人でも多くの人命を救い被害を最小限にとどめるべく、消防組織力及びその対応策等の整備を図るとともに、民間活力の導入をもっと強力に推し進める必要がある。

そのため

- ①救助資器材の充実強化
- ②消防団との連携強化
- ③自主防災組織のさらなる育成強化
- ④行政と市民との一体化と防災意識の高揚及び広報の充実
- ⑤消防教室の実施内容の見直し
- ⑥消防訓練実施内容の見直し
- ⑦各地域毎に市民組織による防災巡視員等を設け住民の意志を吸収し行政に反映する
- ⑧各行政間の連携強化

等々の防災計画の見直しが急務であると痛感した。

まだまだ地震の爪痕はいたる所に残され、危険斜面・擁壁等梅雨期を迎え早急な対応とこれに対処出来る体制を図っているところであると共に、復興に向って市民に信頼される消防人となるべく更に精進努力して行きたいと思っております。

## 無我夢中

北 消防署

中 野 勝 博

これは大変な事がと思っても、！まさかまさか！あんな修羅場を誰が想像できたでしょう。



先ずは受付前に並んでいた市民の列におののき、人一人居ない真っ暗な消防署に驚きました。

119番のやりとりさえも騒音と化しており、非常電源のエンジン音だけが、やけに大きく聞こえたのです。

私は火災現場への出動でしたが、負傷者が戸板で運ばれて行く様を横目に見ながら放水していますと、中年の婦人が「おばあちゃんが埋っていますので助けて下さい」と言い寄って来ました、野田係長の勇気ある決断のもと、一旦放水を中止し燃えていない家の人に「奥さん、すみませんちよっと行ってきます」と断って行こうとする時、けっして怒ることはなく、「早く帰って来て下さいね」と縫るような目で言うのです。

案内されて行きますと、壁土で白っぽく煙った倒壊家屋に文机が梁を支え、布団を被った昨晚と全く同じ姿のままの老婆が、奇跡的にも圧死を免がれていました。

病院前の駐車場には、布団を敷いて手当を待つひと、そのままの人、点滴台を傍らに置いて横たわっている人、看護婦さんをお願いして帰る際、老婆が無言のまま、両手を合わせてくれている姿に熱いものを感じました。

午後には、「御主人、ここに居ますが冷たくなっていますから、生きています人の方に行かせて下さい」と、立ち去っても「そうしてあげて」と涙ながらに納得してくれたのです。

こんな現場の生々しさに、「後を頼む」と妻に託して飛出して来たものの、母や子の身を寄せる場所はと案じながら、気が付いてみれば防火水槽を3つつも空にして飲まず喰わずの奮闘に、言葉でしか知らなかった「不眠不休」も、無我夢中の中で皆と共に頑張れたんだと思います。

あの震災直後、ただ事で無いと直感した職員のすべてが短時間に参集し、出動していった事実、原付や徒歩で28時間掛けて何が何でも職場にの精神は、理屈やない消防としての自覚が自負が、そうさせたのだと思います。

この大災に、水の尊さを悟り、人の和の有難さを痛感した今、我々はなお一層強いチームでありたいと願う所存です。

女々しい私としましては、親父と勤めた5年間

を含め、嫌な時もありましたが続けられたお陰で、大きな夫婦喧嘩もなく子供等とも係わり多く持てたこと、仮家住いになっても恙なく過ごせること何よりと、感謝していますとともに出来ることなら息子達にも、祖父と父のこの仕事を、意気を感じて「よし、俺も」と心密かに願いつつ、大事にしたいですこの仕事。

## 大地が揺れた数10秒

山口分署

西田 秀 昭

大地が揺れたほんの数10秒、平成7年1月17日午前5時46分は、一生忘れることのできない一瞬であった。

突然の大きな揺れがあり自宅で寝ていた私は目を覚まし、何事が起ったのか一瞬判らなかったが、我に返ってみると今までに経験したことのない強い地震であることに気付いた。

揺れが止ってから、家の中を駆け巡り家族の無事を確認し、ほっとひと安心したところ、急に自分の両親のことが気に掛かり実家へ電話をしたがつながらない、何度もするが駄目である。

そこへ、親しい友人からの電話があり「お前の実家が全壊し、その中に両親が生き埋めになっている。近所の人救出しているので、すぐ来い」との連絡があった。

その時に、JR西宮駅周辺はどうなっているかを尋ねたら、殆どの家が倒壊し多くの人生き埋めになり、悲惨な状況であると聞いた。

早速、妻に西宮の実家へ行くよう指示し、私は作業服に着替え自動車勤務している北消防署山口分署へ向った。

私の管轄する山口町地域は家屋の倒壊などもなく、それ程の大きな被害はなかったので、内心「良かったな」と思った。

山口分署へ到着してみたら、消防車両は全て出動した後であったが、その時管制室から当署に待機している非常招集職員4名で一隊を編成し、消防局応援隊として出動命令があった。

消防車両は既に出払っているため、某消防職

員の乗用車で消防局へ出動するも、出動途中での甲山下り坂で段上・広田・北口・建石辺り数箇所  
で火災が発生しているのが見受けられ、さらに甲陽園・河原町・中前田町では家屋や共同住宅が倒壊し、見るに見兼ねる状態であった。

消防局へ到着後、西宮12号車分隊に編入され4名で第1現場である馬場町5-2・便利市場へ救助活動に出動した。

出動途上は、道路上への家屋倒壊による交通障害や交通渋滞による消防車の走行障害が多く、早く現場へ行かねばとの気の焦りから一般車両の運転者に「進路を譲れ」と大きな声で何度も叫んだことを覚えている。

便利市場へ到着すると学生風の若い男が「この2階に夫婦が生き埋めになっているので、早く助けてな」と言ってきた。

便利市場の棟全体は、1階が押し潰され2階は建物の瓦礫の山で埋って倒壊し、その2階中央部で就寝中の夫婦が地震に遭い、生き埋めになったのである。

車載の梯子を使い2階の屋根伝いにベランダへたどり着き、バールや手作業で瓦礫を除去しながら屋内進入し「大丈夫か」と声を掛けると奥さんの返事があり、さらに瓦礫を除去しながらやっとの思いで奥さんのいる位置までたどり着いた。

2階の床板が抜け天井の大きな柱2本が、奥さんの下半身を食い込み挟まって身動きできない状態ではあったが至って元気であった、「ご主人は何処にいますか」と尋ねると「私のすぐ左で瓦礫に埋もれて駄目かもしれない」との返事があった。すぐさま、奥さんの左側の瓦礫を取り除くと、うつ伏せの状態でも返事もなくうずくまっていた。

ご主人は、胸部を柱で圧迫されて呼吸困難なため声もだせずうずくまっていたのである。

「しっかりしろ、今助けるからな」と声を掛けると、返事はないものの首を上下に振ったのでひと安心し、ご主人を先に救出することを決め、バールや人力で柱を動かそうとしてもビクともしない、気はあせるが作業はかはどらない、もっと救助の人手と救助器材があればと悔やみながら時間だけが過ぎ、そうしているうちにも余震が続き、我々もいつ生き埋めになるかもしれないと不安で

あったが救出活動を展開した。

ご主人の呼吸がさらに弱っていくのが伝わってくる。そこへ、誰が連れてきたのか判らないが近所の医者が来て、衰弱しているご主人に注射と点滴をしてくれた。

さらに、見知らぬ人が鋸や自動車のジャッキ数個を持って来て、鋸を使って柱を切る者、瓦礫を手作業で取り除く者、バールで柱を持ち上げようとする者とが消防隊と一致協力して必死になっている姿を見た時、人を助けることの重大さを改めて知らされた。

そして、救出作業が続くなか柱の下部に小さな空間ができ、やっとの思いでジャッキを柱にあてがうことができ、徐々にジャッキアップをすると、今までびくともしなかった柱が少し動いた、これはいけると思いさらにもう1個のジャッキを咬まし、2個のジャッキで柱を持ち上げることができた。「今だと叫び」隊員全員でご主人を引出し作業をすると、ご主人が痛さのあまり悲鳴があったが、「今がチャンスだ」と言い聞かせ、ご主人の悲鳴を無視して身体を引出し救出に成功した。

続いて奥さんを救出するが、ご主人と違っていつも簡単に救出でき、この夫婦を一般車両のワゴン車で最寄りの医療機関へ搬送するよう依頼した。

約3時間の長い救出作業ではあったが、二人を助け出したときには消防人としての使命感に浸ることができ胸が熱くなった。

しかし、それも束の間第1現場の救助活動を終えたことを無線に入れると、第2現場である北昭和町に要救助者がある旨指令が入り再び出動し、その後も次々と救助活動に転戦した。

当日、西宮市内では多くの要救助者がいるなか、私が助け出した人数は僅かではあるが、その現場での救助活動は必死であり、精一杯頑張ったと自分自身を納得させる以外になにもなかった。

また、消防組織の活動問題、人員、資器材の不足など消防としての色々な問題があるものの、今回の震災により消防人として多くの貴重な教訓を得ることができ、さらに、消防は地域住民の先頭に立って、震災に強い街づくりに貢献する立場に



あると痛感した。

## 震災時に給水活動にも従事

西宮市市民局長

清原 進

この度の震災は、我々が未だ経験したこともない大災害であった。その中で、消防団の活動は、自分の家族のこと、家のことを省みることなく、地域の消火活動に、壊れた家屋からの住民の救助活動等に大いに活動されたことを、よく耳にした。この活躍ぶりは、内閣総理大臣表彰、消防庁長官表彰の受賞を始め、全国各地に配布された消防団の啓発ポスターに本市の消防団の消火・救助活動の様子の写真が用いられていること、などが如実に物語っている。

昨年の秋、消防局とタイアップして河川を堰止めての放水訓練を実施したことが、今回の震災での消火活動に直ちに生かされたということも聞いた。このことは、消防団の日常訓練の賜物であり、日常訓練が如何に重要であり、貴いかということ、を、改めて認識されたのではないかと思う。

震災後のある日、私は、消防団の消防自動車が黄色の大きなポリタンクを載せて走っているのを見かけた。その時は、水道の配水管が壊れているので、万一の火災の発生した場合に備えた消火活動用のものとばかり思い込んでいた。しかし、後日、そのポリタンクは、地域の方々に対する給水活動用のものであることを知った。地域の方々には、この給水活動は、大変喜ばれたのではないか。このように、この度の震災では消防団には、本来の職務以外にも市民の方々のために、活躍していただいた。有難いことであった。

消防団長を始め団員の皆さんには、自営業に従事したり、サラリーマンとして勤務するなど日常の生活を営みながら、防火思想の普及、万一の火災・災害発生時には、我が身の危険性をも省みることなく、率先して、市民の方々の生命と財産を守るために、日夜活動していただいていることに対して、改めてお礼申し上げるとともに、今後とも、市民の方々が安心して日常生活が送れますよ

う、活躍されんことをお願い申しあげる次第です。

## 阪神大震災の体験

副 団 長

松本 光 央

平成7年1月17日午前5時46分、観測史上初の震度7の激震が文教都市西宮を巨大な力で襲った。自然の恐ろしさグラグラと横揺れドカンと一発、一瞬の衝撃を受けた。瞬間、体は家具、テレビ等の下敷きになっていた。幸いにも頭から蒲団をかぶったので命は助かった。重くて蒲団から体が出ない。いつも置いている枕元の懐中電灯も飛んだのか物の下敷きになってしまったのか判らない。やっと力をふりしぼり這い出して事務所の懐中電灯を見つける。家の中の有様に蒼白となる。ここが今、自分が生活していた家かと目を疑う。足の踏み場もないガラスの破片で一杯の中を土足で歩く。頭が痛い、家具の下敷きになった時頭を打ったらしく、瘤が2つ3つ出来ているが、すぐ外に出て近所の見回りに行く。倒壊家屋を見て唖然とする。町内が一変している。一軒、一軒声を掛けて安否を確認する中で、怪我人を見つける。一人住まいの中年女性が骨折して動けない、すぐ息子と車に乗せて松本整形外科に運ぶ。医者は来ていないが、病院の事務局に頼んですぐ引き返す。次は、倒壊家屋の階下で老人が生き埋めになっている。助けを求める声が聞こえる。近所の人と力を合わせて救出にかかるが工具がなく、各自ノコギリやバールを探し出してくる。今津分団も現場にかけつけて救助にかかってくれる。ノコギリ、バールでは仲々進まない。イライラしてくる。生き埋めになっている老人に「頑張れ、頑張れ」と声をかけて励ます。約3時間が過ぎ、やっと救出すぐ畳の上に乗せ消防車で協立病院に運ぶ事が出来た。病院の中は頭、手足から血を流して苦しんでいる人、骨折で動けない人で一杯だ。怪我人を病院に頼み、すぐ引返し再び倒壊現場へと向かう。津門で生き埋めの人の救助を求められる。倒壊現場に行き、いくら大声を掛けても中か